



Data

監督：エルネスト・ダラナス・セラ
ーノ

出演：トマス・カオ/ヘクター・ノ
ア/ロン・パールマン/ユリ
エット・クルス/マリオ・グ
エッラ/アナ・グロリア・ブ
デュン/アルマンド・ミゲ
ル・ゴメス/カミラ・アーテ
イツシュ/イダルミス・ガル
シア/アイリン・デ・ラ・カ
リダー・ロドリゲス

👁️👁️ みどころ

「地球は青かった」の名セリフで有名なガガーリンは知っているだろうが、“ソ連最後の宇宙飛行士”セルゲイを知ってる？ゴルバチョフ書記長による“ペレストロイカ”は一方で大きな成果を呼んだが、他方でソ連邦の崩壊という悲劇も・・・。

そんなセルゲイと「宇宙からハロー！」と交信するのは、キューバ人のアマチュア無線愛好家のセルジオ。よく似た名前だが、本来2人の接点はゼロのはず。ところが、ところが・・・。

映画はアイデア！いい思いつきなら何でもオーケー！2020年代は米中による宇宙軍創設競争になりそうだが、そんな時、本作のようなあっと驚く米ソの共同作戦の“前例”があれば、大いに参考になるのでは・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ソ連最後の宇宙飛行士“セルゲイ”を知ってる？■□■

ソ連には「地球は青かった」の発言が有名なガガーリンをはじめとして、有名な宇宙飛行士がたくさんいるが、あなたは“ソ連最後の宇宙飛行士”セルゲイ・クレカレフを知ってる？それを知ってる日本人は、私を含めてかなり少ないはずだ。彼は「旧ソビエトの宇宙飛行士で“最後のソビエト連邦国民”と呼ばれているそうだが、それはなぜ？

第二次世界大戦終了後、1950年代に始まった“東西冷戦”は一方で軍備拡張と核開発競争を生んだが、他方で宇宙開発競争も生んだ。その結果、ソ連はガガーリンをはじめとする多くの宇宙飛行士を生んだが、1980年代のゴルバチョフ書記長の登場と、彼が始めた“ペレストロイカ”によってソ連邦の解体が始まると、経済危機が強まり、次第に宇宙飛行

士の面倒まで見られなくなってきた。ソ連邦の英雄になるべく1991年5月18日にソ連邦から宇宙に旅立ったセルゲイは翌年3月に帰還したため、2005年の時点で“宇宙滞在時間をもっとも長い宇宙飛行士”として宇宙遊泳記録を更新するほど宇宙上で頑張ったが、いざ地球への“ご帰還”の時期になると、帰るべき母国ソ連邦が解体されて存在しなくなっていたから、さあ大変。世の中には“運のいい人”と“運の悪い人”がいるが、宇宙飛行士の中にも“運のいい人”と“運の悪い人”がいるわけだ。

セルゲイ（ヘクター・ノア）はかなりボロボロになっている宇宙船の中から基地に連絡をとり、帰還の手はずの打ち合わせをしていたが、受け入れ側はかなりいい加減。セルゲイは孤独と不安の中、必死に地球との交信を続けていたが・・・。

■□■キューバにも“運の悪い大学教授”セルジオが！■□■

人間はどの時代にどの国に生まれ、どう育つかは自分で制御できないが、まさか宇宙に飛び立った時の母国が地球に帰る時には消滅してしまうとは！宇宙飛行士セルゲイはよほど“運の悪い男”だ。しかし、ソ連にそんな“運の悪い男”がいれば、キューバにも“運の悪い男”がいるものだ。

東西冷戦時代の1960年代には、アメリカの若き大統領ジョン・F・ケネディとソ連の老獪な指導者フルシチョフ首相との間でキューバを巡って「あわや核戦争か！」という事態も生まれたが、その後1989年にソ連邦が解体し、社会主義陣営が弱体化していくと、キューバは必然的に孤立し、経済的困窮を深めていくことに。そんな中、キューバ人のセルジオ（トマス・カオ）はアマチュア無線に精を出していたが、これはあくまで趣味。彼は“若き日”にはソ連邦に留学してマルクス・レーニン主義の哲学を学び博士号まで取得したれっきとした学者だ。

ところが今の彼は、大学教授の立場ながら年老いた母と幼い娘（ダイナ・ボサダ）を養うにも苦勞するほどの貧乏暮らしらしい。その上、今はキューバでもマルクス・レーニン主義は人気がなくなってしまったため、大学での自分の講座さえ消滅の危機に瀕していたからひどい。しかし、趣味の無線をいじっていると、ある日宇宙船の中のソ連人セルゲイと交信できたからすごい。まさに本作のサブタイトル通り「宇宙からハロー！」にセルジオはビックリだが、時代状況の中、コトはそれだけでは済まない大変な事態に・・・。

■□■アメリカにも、怪しげな無線仲間ピーターが！■□■

1990年代のアマチュア無線の技術で、どの程度の範囲の通信が可能なのか、私にはサッパリわからないが、セルジオはキューバの共同住宅の屋上の装置で宇宙飛行士セルゲイとの交信ができたのだから、当然キューバとアメリカとの交信は可能。なぜなら、セルジオがかつて留学したソ連邦は“遠くて近い国”だが、隣国のアメリカはキューバにとつて逆に“近くて遠い国”なのだから。

それはすぐにわかるのだが、セルジオがアメリカのニューヨークで交信している男ピーター（ロン・パールマン）は「アポロ計画の陰謀」を書いたジャーナリストらしい。私には、この男の主張がどうなのかはわからないが、その著書のタイトルからわかるとおり、この男はかなりヤバそうな男だ。したがって、キューバ危機以来ずっと“敵対関係”にあるアメリカのこんなジャーナリスト、ソ連邦に留学しマルクス・レーニン主義を学んだキューバの大学教授が、アマチュア無線とはいえ、日常的に連絡を取り合っているのはかなりヤバイし怪しい。これが社会主義国キューバの政府に見つかれば、セルジオは逮捕されてしまうのでは・・・？そんな心配をしていると、案の定・・・。

■□■共産主義国では、この“お楽しみ”もスパイ活動に？■□■

三谷幸喜の原作・脚本を星護が監督した『笑いの大学』（04年）では、昭和15年の軍国色濃いニッポンで、検閲官を演ずる役所広司と劇団「笑いの大学」の座付作家を演ずる稲垣吾郎の2人の「取調べ」の場が、なぜか、いつしかよりよい台本づくりの共同作業の場になっていくという面白い風景が描かれていた（『シネマ6』249頁）。それと同じように本作後半からは、アメリカの怪しい男や宇宙飛行士と“ハロー”の交信を続けているのでは？という“嫌疑”をかけられたセルジオが、社会主義国キューバの“当局”からとつちめられ、厳しい取調べをうけるストーリーが登場する。その担当は、少しはセルジオの主張に理解を示しそうな女性だが、所詮共産主義国の“官僚”だから、ホントにどこまでわかっているのかは疑問。したがって、セルゲイがいくら「宇宙飛行士とハローしているだけだ！」「これは俺の趣味なんだ！」「決してスパイ活動なんかではない！」と訴えても、『笑いの大学』の検閲官のように、「宇宙からハロー！」の楽しみをわかってもらうのは所詮ムリ！

さらに、社会主義国では“タレ込み制度”が発展しているから、セルジオの共同住宅のベランダに密かに設置しているアンテナ類を探る当局の“回し者”がおり、その男から取調べ官に対する情報が次々と・・・。もちろん、いくら社会主義国でも勝手にセルジオの家の中に入って証拠品をあさるのはムリで、そのためには捜索令状が必要だが、ある日たまたまセルジオの家のドアが開けばなしになっていたため、その“回し者”がセルジオの部屋の中に入ってみると、何とそこには・・・？

■□■配給だけで食えないのなら・・・？■□■

日本でも敗戦後の、モノがなく食うにもコト欠く時代には、国はやむなく“配給制”を実施していた。これは国による“統制経済”の一形態で、貧しい時代には仕方ないが、そこでも敗戦後の日本人は民間活力を活用し（？）、ヤミ市がまかり通っていた。それと同じように、ソ連邦の崩壊に伴って困窮化を深めていたキューバが、配給制による統制経済になっていたのは仕方ない。そこで問題は、それをきちんと守るのかどうかだが、日本では山口良忠裁判官のように「闇市の闇米は食わない」と宣言して配給食糧のみを食べ続け、遂に

栄養失調で餓死した例もある。しかして、セルジオは？

現在、セルジオにはスパイ容疑をかけられていたが、元来、彼はソ連に留学してマルクス・レーニン主義を学んだホンモノの社会主義思想の持ち主。したがって、キューバ政府が現在実施している配給制についても、仕方なしと容認していたから、自分がそれを守るのは当然のこと。その点では、日本の山口良忠裁判官と同じ考え方だ。しかし、配給制では娘が牛乳を飲むことすらできないという現実が突きつけられ、セルジオとは正反対の“現実主義者”である母親からその改善要求を突きつけられると・・・？

それを応援したのは、工業用アルコールから酒をつくる技術を持っているセルジオの友人。日本でも戦後そんな技術がもてはやされたそうだが、さて本作のスクリーン上にみる闇酒製造の風景とは・・・？この密造酒を売れば、娘の牛乳代なんてちょろいもの。そして、いったんそんな悪事(?)に手を染めると、後は一気呵成にその方向に突き進んでいくのが人間の常だ。しかして、ある日こっそりセルジオの家に中に忍び込んだ“回し者”は、そんな大規模な密造装置を発見したからさあ大変。こんな悪事を働くセルジオのスパイ容疑は明らかだ、と思われてしまったが・・・。

■□■米国のNASAが協力すれば！■□■

1960年代がアメリカとソ連による宇宙飛行競争の時代なら、2020年代はアメリカと中国による宇宙軍創設競争の時代。トランプ大統領の“宇宙軍”創設構想の演説を聴いていると、そう考えざるをえない。すると、現在の“米中貿易戦争”は序の口で、2020年代は宇宙を巡る新たな“米中冷戦”の時代に・・・？

大方の予想はそうだが、そんな時代なればこそ、本作のような“大人の童話”が、そしてアマチュア無線に夢中になっている大人たちが織り成すあっと驚く物語の価値がある。すなわち、本作ではキューバに住むアマチュア無線愛好家のセルジオが、ソ連の宇宙飛行士セルゲイやアメリカのジャーナリスト、ピーターらと無邪気に「宇宙からのハロー」を交信している中、セルゲイを地球上に帰還させるについて、アメリカ航空宇宙局(NASA)に協力させるという、とんでもないアイデアを思いつくわけだ。NASAはアメリカ合衆国政府内における宇宙開発に関わる計画を担当する連邦機関で、1958年に国家航空宇宙法に基づき、先行の国家航空宇宙諮問委員会を発展的に解消する形で設立されたもの。その目的は、宇宙開発に加えて宇宙空間の平和目的あるいは軍事目的における長期間の探査だから、広く解釈すれば、ソ連邦崩壊という大混乱の中で帰るべき祖国を失った宇宙飛行士セルゲイを、無事に地球に帰還させることもその目的の中に入るはず。本作を監督したエルネスト監督はそう考えたのだろう。

もちろん、現実にはあの時代にアメリカのNASAがソ連の宇宙飛行士セルゲイのために協力することは考えられないが、映画ならそれもオーケー。すると、その実現のためには、何が必要？そう考えると、やはり子供のように無邪気にアマチュア無線にのめり込み、

「宇宙からハロー！」という通信を交わすセルジオのような男が不可欠なわけだ。

さあ、本作ラストのクライマックスに向かっては、そんなセルジオのアイデアによって実現した米ソ共同作戦によるセルゲイの地球への帰還風景をタップリ楽しみたい。そして、そこから、今後始まるであろう、米中の宇宙軍開発競争に欠かすことのできない教訓をしっかり刻み込みたい。

2019（平成31）年1月10日記